



SAIHIKA 201709

SAIHIKA201709

表紙 鴉和 P.1

目次 ヒカル P.2

A Wonderful Table. ヒカル P.3

人も花なれ T.K P.15

キュウセイの魔女とその騎士 マウス P.21

SAIHIKA201709

学校で米を炊くのは変なことらしい。

以前、ある先生に言われた。

『学園で米を炊いた学園生は見たことがない』

『ベテランの先生に『学園で米を炊く学園生っていると思いますか？』って聞くと『大丈夫か？』って言われた』

どうやら俺は常識がないらしい。

クラスで話す人はそこそこいるし、友達だと思える人もいる。

でも、その人たちとどこかへ遊びに行ったり、そういう関係になったりすることはあまりなかった。

クラスメイトと友達？ その境が曖昧になってるだけ？

単なるクラスメイトを友達と思っていただけ？

そうかもしれない。

休日一緒に遊びに行く友達なんて一人だけだったから。

クラスメイト、知り合いと友達の境が曖昧になるのなら、友達と恋人の関係も曖昧になるのかもしれない。

キスは俺と紫子の関係を語る上で外せないものになってしまったが、キスという言葉が俺たちの関係を単に示すわけではないだろう。

それとも俺たちはもうとっくに恋人？

友だちになる時に契約を必要としないことと同じように、恋人になるのも劇的な変化がないのでは？

最初、キスされた時のことを覚えている。

それがどういう意味なのか、どういう行為なのかもわからないまま。

ただわかるのは唇の温度だけ。

ただわかるのはその接触がとても気持ちのよいものだと思ってしまった。

それがどういう意味なのか、なにもわからないまま。

わからなかった？ わかるうとしなかった？

わかるはずがなかった。

いつだったか京子に聞いたことがある。

京太郎『京子はさ、キスしたことある？』

京子『！？』

京太郎『なんでそんなに引いてるんだ？』

京子『に、兄さんはしたのか？』

京太郎『いや、俺が聞いてるんだけど……』

京子『私は……ないよ』

京太郎『したいと思ったことは？』

京子『うーん、どうだろう？』

京太郎『誰かにキスしたいと思われたことは？』

京子『誰かが私に？』

京太郎『そう』

京子『そんなのわかるはずないじゃないか』

京太郎『じゃあ俺がキスしたいって言ったらどうする？』

京子『大丈夫か兄さん、私に手を出すのはまずいよ』

京太郎『仮定の話だって！俺が京子に好意を抱いてるクラスメイトだったとして』

京子『うーん、兄妹感系抜きで兄さんを見たらどうだろう？』

京子『これも仮定の話だけど、私がクラスメイト兄さんのことが好きだったら OK するし、嫌いだったら NO だね』

京太郎『好きだけど恋愛関係じゃない程度の相手だったら？』

京子『断るかなあ？』

京太郎『無理やりしてきたら？それで相手のキスが嫌じゃなかったら？』

京子『やけに前のめりだね。キスされて嫌じゃないってことは、それはもう好きってことじゃないの？』

京太郎『そうか……そうなのか……』

京子『ねえ兄さん。彼女が出来たとかそういうのじゃないの？』

京太郎『違うよ』

キスされて、嫌じゃなくて、それでドキドキして。

つまりこれが恋なのか？

あるとき張本人は言った。

紫子『先輩とのキスは気持ちいいです。癖になります』

京太郎『……はあ……』

紫子『先輩は気持ちよくないですか？ドキドキしませんか？』

京太郎『……………しない』

紫子『ちゅっ』

紫子『ドキドキ、しませんか？』

京太郎『……………します』

紫子『はあい。私もドキドキしますよ』

紫子との帰り道。

紫子「今日は楽しかったですね！」

京太郎「俺はここ数ヶ月で一番疲れたよ」

紫子「そうですね。久しぶりにめちゃくちゃ楽しかったです」

京太郎「ハトハトだ」

紫子「こんなに素晴らしかったのは去年の海以来じゃないでしょうか？」

去年……海……。

京太郎「ウツ……」

紫子「とっても楽しい思い出ですねえ」

京太郎「……デスネ」

紫子「明日は学園の女神藤堂染衣「先輩とデートですか。先輩はモテモテですねえ」

京太郎「染衣さんと電話したって言ったっけ？ あとデートじゃない。」

紫子「わかりますよ、それくらい。男の子と女の子と一緒に遊びに行くのはデートです」

京太郎「そうか……。じゃあ俺と紫子は……」

紫子「先輩」

京太郎「？」

紫子「明日のデート楽しんできてくださいね」

京太郎「お、おう」

染衣「京太郎くんはお友達とよく遊びに来るの？」

京太郎「来ますね」

染衣「その時はどんなことしてるの？」

京太郎「ウィンドウショッピングに付き合ったり、本見たり、映画見たり、お茶したり……。いろいろっすね」

染衣「すごい。エキスパートだ！」

京太郎「ショッピングモールエキスパート？」

染衣「じゃあ私は……。どうしよっか？ 京太郎くんの行きたい所はある？」

京太郎「俺の行きたい所か……。なんか新鮮だな。よく一緒に遊ぶやつにいつもぐいぐい引っ張られてるからなあ」

染衣「仲いいんだね？」

京太郎「まあ、な」

染衣「紫子さん？」

京太郎「……うん」

染 衣「仲いいんだね？」

京太郎「……うん」

染 衣「えっと、あの。詮索しようとしてるんじゃないけど、ちょっと気になって。……って詮索だね」

京太郎「なんでも聞いてください」

染 衣「何回くらい遊んだの？」

京太郎「何回……えっと。付属校3年生の時はちらほら。俺が本校に上がった時は週1くらい。今年はいつも本校に上がって学校で会う時間が増えたから、遊ぶ機会は去年に比べて減ったかな」

染 衣「すごい……」

染 衣（私まだ2回目……）

染衣さんが小声で何かを言ってる。

京太郎「……俺が付属校2年の時、最初の方はそういうの全然だったよ」

染 衣「そうなの？」

京太郎「ああ。仲良くなったって実感するのは3年になってからだったな」

染 衣（私と京太郎くんが会ってからまだ1年ちょっと。そう考えると同じペース？）

染 衣「そっか。紫子さんは私の知らない京太郎くんを知ってるんだね……。それを言うなら京子さんが一番知ってそうだけど」

京太郎「京子との付き合いが一番長いからな。当たり前だけど」

染 衣「ねえ京太郎くん」

京太郎「なに？」

染 衣「なんで京太郎くんの周りには可愛い女の子が多いの？」

京太郎「ブッ！」

思わず吹き出した。

染 衣「京子さんは細くて可愛いし、紫子さんは髪が綺麗で美人だし、幟さんは身長高くてキリッとしてるし、日良々さんは守りたくなる可愛さだし……」

京太郎「たしかに、そうだけど……」

染 衣「めちゃくちゃ不思議だよ」

京太郎「染衣さんも、美人だしね」

染 衣「えっ！ あう……」

赤くなる染衣さん。彼女の自己評価は低い。

染 衣「私は、まあ……」

京太郎「過度な謙遜は？」

染 衣「よくない……です」

京太郎「つまり、染衣さんは？」

染 衣「わ、私が答えるのはなんか違うよっ」

染衣「は、話を戻しましょう。えっと……なんだっけ？」

染衣「こほん。それでは参りましょう」

A Wonderful Table.

幟 「ねえ日良々」

日良々「はい」

幟 「なんでボクなの？」

日良々「えっ、だめ……、ですか？」

幟 「ああ、ごめん。そういう意味じゃなくて。京太郎じゃなくていいのかなって。にやにや」

日良々「えっと、佐久間君は染衣ちゃんと遊んでますから」

幟 「お、そうなんだ。って、あの二人はもうできちゃってるのかな？」

日良々「まだ、だと思えます」

幟 「そっかぁ」

日良々「はい」

幟 「それで、ボクを誘ってくれたんだね」

日良々「部屋に上げてくれてありがとうございます」

幟 「いいよ。トモダチ、だからね」

日良々「えへへ」

幟 「なにしょっか。というかボクは聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

日良々「はい。なんですか？」

幟 「京太郎と、染衣と、紫子……。あと京子とボクと日良々だね」

A Wonderful Table.

京子（鎖雨と遊んだ翌日に染衣さんと、か）

京子（兄さんもいいご身分になったことですね）

A Wonderful Table.

紫子（……）

紫子（夢、でしたもんね。先輩）

紫子（学校でお米を炊くのは……）

A Wonderful Table.

京太郎「おいしいね」

染 衣「ね」

わりと面白そうだけど、映画館まで足が伸びなかった映画を二人で見た。

わりと面白かったのでポップコーンを食べる暇もなく、観賞終了後に消化中。

染 衣「一人で来る時はなかなかポップコーン食べないから久しぶり」

京太郎「俺も」

染 衣「京子さんと来る時は食べないの？」

京太郎「あいつは『映画を見る時に何かを食べるなんて邪道』っていう立場だからな～」

染 衣「そうなんだ」

染 衣「結局ね、銃を乱射するシーンがあれば私はそれなりに満足なの」

京太郎「同意」

染 衣「弾丸が鉄板を破る音と映像が……。あ、これ京太郎くんに似合いそう」

京太郎「そうかな？ この色あんまり着たことが……」

染 衣「絶対似合うって」

京太郎「映画館で見るんなら映像を見たいっていうのが俺としては……。染衣さん、これどう？」

染 衣「こういうのは幟さんみたいな脚の長い人がいいかも」

染 衣「私このクッションほしい。家でもふもふする」

京太郎「俺も欲しいけど、怠惰が加速しそう……」

京太郎「なんかよくわからん形の髪留めー」

染 衣「いらないけどほしくなるよね」

京太郎「つける？」

染 衣「つけない」

映画の感想を言い合ったり、映画論を披露し合ったり、おすすめし合ったり。

ふつーに遊んだ。

染 衣「楽しかった！」

京太郎「結局何も買ってないけどね」

染 衣「そうね。でも、よかったよ」

帰りの電車を待っている。

染 衣「映画も見たし、ウィンドウショッピングしたし」

京太郎「楽しんでくれたならよかった」

染 衣「うん。初めてだったから。こうやって、お友達と一緒にショッピングモール回るのなんて」

京太郎「俺も……楽しかったよ」

振り回されるんじゃないくて、ゆったりするのもいいかな。

電車に乗って、帰ってくる。

染 衣「明日から学校かぁ」

京太郎「あっという間だったな」

染 衣「その言い方なんだか夏休み明けみたい。でも、そうだね」

京太郎「まあ、またこうして誘ってくださいな」

染 衣「誘ってくれたら、来てくれる？」

京太郎「もちろん」

染 衣「そっか」

京太郎「うん」

染 衣「京太郎くんからも誘っていいんだよ」

京太郎「もちろん」

ちょっと名残惜しくなりながらも解散した。

A Wonderful Table.

幟 「なんだかそれが正解な気がする」

日良々「です、ね」

幟 「確かめる必要があるね。ボクがやってみよう」

A Wonderful Table.

京太郎「ごめんなさい」

紫 子「ごめんなさい」

染 衣「ごめんなさい」

京 子（染衣さんが謝る必要ないと思うんだけどなぁ）

日良々（みなさん仲良し？）

幟 （面白いなぁ）

京太郎「改めて、佐久間京太郎だ」

京太郎「学園内で米を炊ける場所を探した結果、屋上にたどり着いた」

京太郎「この奇妙な縁を……」

幟 「真面目すぎるぞー」

京太郎「うるせえ」

染 衣「それじゃ質問するね。休日は何してますか？」

京太郎「えっと、家でダラダラして映画を見るか、外に遊びに行くか……って感じだな」

京子「質問。兄さんは誰と遊びに行ってるのかな？」

京太郎「……お前とか、紫子とはよく行くな。昨日は染衣さんと遊んだ」

日良々「質問です。染衣ちゃんとはどうやって出会ったんですか？」

京太郎「米を炊く場所を探してる時に空き教室で、だな」

紫子「可愛い後輩のことをどう思ってますか？」

京太郎「俺の手に余る……」

幟「質問だ。ぶっちゃけこの中で誰がタイプ？」

京太郎「ブッ」

一同が俺を見る。

幟「一番気になるなーと思って」

京太郎「えーっと、なあ」

幟「まあ言いにくい。じゃあ、変更。女の子の胸は大きい方がいい？ ちっちゃい方がいい？」

京太郎「何の質問だ！ ……女性の魅力は胸だけじゃないと思うので、どちらでもない」

幟「つまんね」

京太郎「せっかく答えたのに何だそれ」

京子「佐久間京子。兄さんの妹です」

京子「つい一ヶ月前までは兄さんと二人だったのに、随分賑やかになりましたね」

京太郎「質問。最近兄への態度が冷たいのですが」

京子「胸に手を当てて考えてください」

日良々「質問です。京子ちゃんは好きな人いますか？」

京子「いないですね」

幟「質問。京子モテるでしょ？ そこんところどうなの？」

京子「まあ、告白は何回かされたことがありますね」

京太郎「マジかよ誰だ！」

京子「全部断ったから大丈夫だよ、兄さん」

日良々「佐久間君は京子ちゃんが大事なんです」

京太郎「当然」

染衣「質問。お兄さんがいるってどんな感じなのかな？」

京子「生まれた時からいますからねえ。わからないです。もしよかったら兄さん貸しますよ」

京太郎「俺の立場は！？」

染衣「それはいいかもね」

紫子「質問」

ごくり。と、みんなが息を呑むのがわかる。

この二人の関係はなにかがある。

紫子「お兄さんのこと、好きですか？」

京 子「好きだよ」

紫 子「わお。断言しちゃうんですね」

京 子「ああ」

特に何も起きなかった。

日良々「算日良々……です」

日良々「佐久間君のご厚意で、ここに寄せてもらってます」

京太郎「質問。昼食会はどう？」

日良々「おかげさまで、楽しいです」

幟 「質問！ 何カップ？」

日良々「えっ！？」

スパンと幟の頭を叩く。

京太郎「答えなくていいよ算さん」

幟 「冗談さ。じゃあ、何を食べたらそんなに大きくなるのか教えてもらってもいいかな」

京太郎「結局セクハラじゃないか」

日良々「えっと……わかりま……せん」

紫 子「質問です。何か特別なストレッチとかマッサージとか、習慣はありますか？」

日良々「な、ないと思います」

京太郎「お前らセクハラがすぎるぞ」

幟 「うるさい京太郎」

紫 子「こっちは切実なんですよ」

おこられた。

染 衣「質問。その髪型、どうかな？」

日良々「はい。とっても気に入ってます」

染 衣「よかった」

京 子「質問です。この前、誰かに校舎裏に呼び出されてましたけど……あれはなんだったんですか？」

京子がにやにやしなから聞く。こいつの質問が一番夕子が悪い。

日良々「あう……あれは……あの……」

幟 「告白か！ 日良々可愛いからなあ」

日良々「うう……。可愛く……ない、です」

うつむく算さん。

染 衣（かわいい）

紫 子「どうだったんですか。日良々先輩！」

なんでお前が一番興味津々なんだよ。

日良々「お断り、しました……」

顔を上げた算さんと目が合った。

京 子「なるほど」

幟 「ふうん。にやにや」

日良々「あう……」

顔を赤くして下を向いた。

幟 「九島幟。京太郎に誘われて昼食会に参加したよ」

幟 「チャームポイントは脚かな」

ウインクで両目を瞑る。

日良々「質問です。どうやったら身長が伸びるんですか？」

幟 「よく食べてよく寝ることかな」

日良々「が、頑張ります」

幟 「あはは。日良々はそれくらいが一番かわいいよ」

京子「根本的な質問ですけど、兄さんとはどうやって知り合ったんですか？」

幟 「それは秘密さ。ただ、ボクの秘密を知ってしまった京太郎が、自分の秘密としてここを紹介してくれたってことかな」

紫子「質問です。どうして一人称がボクなんですか？」

幟 「うーん。子供の頃男子と遊んでたから、うつったのかなぁ？ 気が付いたらボクって言うてたね」

京太郎「質問。お前こそモテるんじゃないの？」

幟 「モテるよ」

京太郎「やっぱり」

幟 「なぜか女の子に……」

遠い目をした貴重な幟。

染衣「質問です。女の子に告白された時のいい対処法を教えてください」

ここにもいた。

幟 「ボクが知りたいよ……」

紫子「鎖雨紫子。先輩とは付属校時代からの仲です」

紫子「飴とか、ペロペロするものが好きです」

日良々「質問です。紫子ちゃんの趣味はなんですか？」

紫子「そうですね。本を読んで知識を身に付けたり、先輩……京太郎先輩で遊んだり、ですね」

京太郎「やっぱり俺をおもちゃと思ってやがったのか」

紫子「間違えました」

染衣「質問です。とっても綺麗な髪ですけど、なにか気をつけていることはありますか？」

紫子「洗う時、ドライヤーをかける時、丁寧にすることですね。愛情を持って、綺麗にしてあげようと思っています」

京太郎「質問。俺としてはお前が誰かと普通に会話してることに驚いているんだが……。この女性陣の中で今一番気になってる人は誰？」

紫 子「うーん、私としてはぜひ日良々先輩と仲良くしたいですね」

日良々「わたし、ですか？」

紫 子「はい。よろしければ」

日良々「はい！ こちらこそ、です」

紫 子（触ったら御利益あるのかしらん）

幟 「質問質問。京太郎のいいところを3つ挙げよ！」

紫 子「無茶しても大体許してくれるところ。戸惑うと可愛いところ。気を配ってくれるけれどたまに失敗するところ」

京太郎「褒められてるのかけなされてるのか……」

京 子「質問。嫌いな食べ物、ある？」

紫 子「苦いものは苦手です」

京 子「そうか」

染 衣「藤堂染衣です」

染 衣「楽しい昼食会にしていけたらな、と思います」

幟 「質問。今年のミスコンへの抱負は？」

染 衣「もう出たくない……」

幟 「でも染衣が出ないと意味が無いからなあ」

染 衣「幟さん代わってえ」

京 子「質問です。染衣さんはコンタクトにはしないんですか？」

染 衣「目に何か入れるの怖いよ」

京 子「そうなんですかね」

幟 「眼鏡は染衣のチャームポイントだしね」

染 衣「その自覚はないけど」

日良々「質問。昨日はどうでしたか？」

染 衣「楽しかったよ」

紫 子「質問です。今まで何人と付き合ってきましたか？」

染 衣「ぜ、ゼロ、です」

幟 「ボクたちの恋愛事情は悲惨だなあ」

京太郎「質問。予想以上に大規模になった昼食会だけど、こんなんでもいいんですかねえ」

染 衣「私はいいと思うよ。こういうのも楽しいし」

幟 「せっかくの縁だしね」

日良々「みなさんと仲良くなれましたし」

どうなるかと思われた昼食会は穏便に終わった。

その後も、特に騒動が起きることなく、毎日の昼食会が行われる。

京太郎「そういや、プールの招待券があるんだけど。ちょうど6枚」

幟 「いいね、行こうよ」

紫 子「私も OK です」

京 子「もちろん私も」

日良々「水着……ですよね」

幟 「日良々の水着楽しみだなあ」

日良々「は、恥ずかしい……」

幟 「京太郎も見たいよな。日良々の水着」

算さんの水着姿を想像してしまう。

京太郎「うん」

京 子「兄さん顔がいやらしいよ」

幟 「ほら京太郎もそう言ってる」

日良々「じゃあ、参加します」

京太郎「染衣さんは？」

染 衣「えっと……、水着、持ってないの」

京 子「じゃあ買いに行きましょうか」

染 衣「……そうね」

というわけでプールへ行くことが決定した。

プールは再来週に。

今週末は再び幟の部屋へと呼ばれた。

幟 「流石に二回目だとドキドキもしないだろう」

京太郎「そうかも？」

幟 「さて、肝心な話を一番最初にしよう」

京太郎「なんだなんだ？」

幟は俺の目をじっと見つめてきて。

幟 「覚えてる？ 前にうちに来た時のこと」

京太郎「おう」

幟 「罰ゲームのお願いってまだ使ってないよね」

京太郎「そうだな。いつ使われるかビクビクしてるぞ」

幟 「じゃあ、今ここで使うね」

そう言った幟の表情はいつになく真剣で。

京太郎「ああ、なんでも来い」

これからなにかがはじまるんじゃないかな、そう思った。

幟 「京太郎……」

幟 「ボクの恋人になってくれないか？」

人も花なれ

TK

その人は花のような人だった。

僕が八時六分のバスに乗ると、決まって後ろの方にある窓際の席で、静かな面持ちで本を読んでいる。

本人としては、自らをどこにでも生えている多年草、シロツメクサのようなものだと例えそうなものだが、竹の花や龍舌蘭と言っても差し支えない。

比較してしまえば、周囲の人々が花にすら見えないほどだった。

僕はいつもその人に一瞥を投げ、バスに乗る。故意に見ているという気はない。けれど、その人の姿がどうしても視界に入ってくる。どうしてそうしてしまふのか考えてみたけれど、途中でやめてしまった。

それから学校に着くまでの間、何を見るわけでもなく、窓の外を眺める。彼岸花が咲いていて、もう夏も終わりだな、とぼつり思った。

バスが停留所に止まると、制服姿の人はみな降りていく。僕とその人も例外ではない。そろそろと歩き、校門をくぐると、どこからともなく金木犀の匂いがした。

ガヤガヤと騒がしい下駄箱で靴を履き替え、教室に向かう。正直、僕の足取りは重い。授業を受けるのはもちろん嫌だが、理由はもっと別のところにある。

席に着き、一時間目に使う教科書と部活で使っているノートを鞆から引っぱりだしていると、程なくしてその人が僕の隣の席に座った。

これが一ヶ月も続くのだと考えるだけで、ウツボカズラの捕虫袋の中でじん

わりと溶かされていく虫のような気分になる。というのはよっぽど言い過ぎだが、何かしら居心地が悪いことだけは確かだ。

この日も、僕は見た目には平和な一日をおくった。ホームルームが終わり、放課後になったので脇にノートを抱えて部室へ向かう。わざわざ鞆から出しているのはたぶん、早くこれを見てもらいたいから。

ガタン。

「……あれ？」

いつもは後輩が先に来て開けているはずなのだが、珍しく鍵が閉まっていた。ホームルームが長引いているのだろうか、と疑問に思いながら僕が職員室に鍵を取りに行くと、鍵は既になかった。

どうやら入れ違いになったらしい。

再度部室に戻って扉を開けると、そこには柔らかな風に揺れるハイビスカスのように髪を靡かせるその人がいた。

僕は立ち止まった。

「一年生と二年生はまだ来てないわ」

「ぞ、そうなんですか」

「……………」

黙ってこちらを見るその人は、後ろから夕日で照らされていて、絵に描けば、

「輪だけで一面のコスモス畑やひまわり畑にも負けないほどだと思った。」

「入ってこないの？」

「あつ、えつと……そつですね」

呆れたような声で僕は現実を引き戻され、部室に入って戸を閉めた。

とりあえず手近なところに鞆をおろし、椅子に座ってノートを出した。

「それ、少し見せてもらってもいいかしら？」

「あっ、はい」

その人はずっと無口なはずだった。必要なことを必要なだけ話す以外の会話なんてしたことがない。このノートについて話すのは必要なことだとは思っけれど、今日は様子が違うように見える。

開け放たれた窓から入ってくる風の音と運動部の声を上からかき消すように、パラパラと紙をめくる音が静かに響く。

「……よくできていると思うわ。スイセンをニラと間違えて食べてしまったあなたのお祖父様の話が良い教訓でもあり、堅苦しいノートに花を添えているわね」

その人がこんなにも話すのは、ずっと同じ部活をしてきたけれど、間違いく初めのことだった。

やはり、彼女にとってもこの日は大切なのだろうか。僕がこのノートを作っていたように、彼女も僕と同じ気持ちなのだろうか。

「後ろにいくらページが空いているけれど……加筆しても？」

彼女は自分の鞆から筆箱を取り出しつつ言った。僕は頷いた。もともとそのつもりだったからだ。

「……じゃ、じゃあ、僕はカブの様子を見てくるんで……」

でも、彼女がいくら別人のように話しても、僕は僕だ。僕らの学年には僕らだけ。それでも全く話なんてしなかった。今さら変わるわけなんてない。

僕は逃げるように部室の戸を開いた。今日で終わりなんだ。今日が終われば、本当に赤の他人なんだ。

「ねえ」

引き止められるなんて予想もしてなかった僕は、驚いて振り返った。

「今朝、通学バスの中で、読んでいた本からふと目を離すと、貴方が私を見ていたの」

顔が熱くなる僕をよそに、彼女はノートに文字を書き続ける。

「私がこんなことを言うのは、冬に咲く紫陽花のように奇妙かもしれないけれど、もうやめてほしいの。そういう風に接するのは」

感情的になるわけでもなく、彼女は淡々と語り続ける。

「確かに部活は今日で引退だけれど、だからといって私と貴方が消えてなくなるわけではないのよ」

彼女は急に立ち上がり、立ち尽くす僕のほうへ歩いてきた。思わず目をそらす僕の前に、手が差し出された。

「貴方も私と同じ気持ちなのだぞと知れて嬉しかった。これから、よろしく」

彼女の目は、僕を真っ直ぐ見据えていた。

それは余りに急なことだ、こんなことになるとは微塵も思っていなくて、僕は。

真後ろのドアが開きっぱなしだったのを良いことに、部室から逃げ出してしまった。

その日、僕が部室に戻ることはなかった。

★

翌日、僕はバスに乗る時間を一本早くした。

こんなことをしても教室で顔を合わせるのだから、意味が無いとわかっているけれど、彼女に合わせる顔なんてない。いつそ学校を休んでしまおうかとも

思ったが、特に体調が悪くもないのに休むなんて両親が許してくれるはずもなかった。

教室に行くと、ほとんど人がいなかった。始業にはかなり早い時間帯なのだから当たり前だが、その光景に僕は安堵した。

彼女のことだから、教室なら何を言われることもない。放課後ちゃんと謝罪すれば良い。そう自分に言い聞かせて、授業が始まるまで机に突っ伏して寝たふりを決め込むことにする。

やがて、がやがやと教室が騒がしくなる。隣に人が座った気配はないが、きっと彼女は来ているだろう。けれど、もし仮に顔を上げて隣にいても、もう大丈夫な気がした。

チャイムが鳴る。

僕はゆっくりと起き上がる。

横目で見ると隣の席は、ぼっかりと空いていた。

何で？ どうして？

僕の中に疑問が湧き上がる。彼女が休んだところは全く見たことがない。その疑問はすぐに、僕のせいかもしれないというドス黒い後悔に変わる。

自意識過剰かもしれないが、昨日の今日なのだから、そう考えてしまうのは仕方がない。

だから、その後の授業が全く頭に入ってこないのも、仕方のないことだった。

★

放課後を告げるチャイム。

僕は引退したはずなのに、部室へ足を向けていた。今日彼女が休んでいる理

由を探すためだ。答えは明日になればわかるかもしれない。けれど、このまま放っておいてはいけなないと、僕の頭の中で警鐘がけたたましく鳴り響いていた。

部室のドアを開けると、そこには仁王立ちで立つ先輩がいた。

「先輩！ どうしてそうへたれなんですか！ へっぼですよへっぼこー！」

僕を見るなり罵声を浴びせてきた。実際、そう言われるだけのことをしてかしたので何も言い返せない。

先輩のこの女の子は、いつもあまり話さない僕と彼女に積極的に話しかけてくる変わった子だった。彼女が昨日のことを誰かに話すとは思えないし、この子は逃げていく僕を見たのかもしれない。

もしくは、僕と彼女が一对一で話す機会をくれたのは、先輩だったという可能性も十分にある。でも、今となってはどっちでもいい。

「僕は……」

歩み寄る僕に、その子は黙って紙袋を差し出した。

「引退のお祝いです。先輩お二方ともに渡していません」

「！ それって……」

「私たちの分までお願いします。その中に、昨日風邪気味と聞いて、がんばって聞き出しておいた先輩の家の住所を書いたメモも入れていますから。さすがに今度は、逃げませんよね？」

僕は紙袋を受け取り、力強く頷く。

満足そうに微笑んで手を振るその子を横目に、僕は部室を飛び出した。最後の瞬間、その表情が曇ったような気がしたが、僕には最早、迷いはなかった。

★

急いでバスに乗り、目的地へ向かう。住所的には、僕の最寄りの停留所から一つだけ遠い停留所だった。

バスを降りた後は、逐一スマホを確認しながら歩いては止まりを繰り返す。辿り着いた先は、大きなマンションだった。

オートロックなので、エントランスで部屋番号を押す。いつもであれば緊張して手が止まるが、今日の僕は昨日の僕とは違う。授業中ずつと味わったようなあの気持ちはもう嫌だ。

最後のボタンを押すと、コール音が鳴る。程なくして、受話器を取る音が聞こえた。

「あ、あのっ！」

「……申し訳ないのだけれど」

カメラが付いているようなので、すぐに僕とわかったのだろう。その言葉を聞いて、視界が揺らぐ。それでも僕は言葉を紡ぐとして。

鍵の開く音がした。

「上がってきてもらえるかしら」

早とちりしたこと少し恥ずかしさを感じつつ、僕は「はい」と一言答えて通話を終えた。

エレベーターで最上階まで上がる。

インターホンを押すと、彼女はすぐにドアを開けてくれた。マスクをしていて、少し顔色が悪い。

「ごめんなさいー」

すぐに僕は平謝りした。これ以外どうすればいいかわからない。でもこれは僕の正直な気持ちだった。

「いいのよ。折角来たんだから、上がっていったって」

「え？ ええっ！」

彼女に手を取られ、なし崩し的に部屋に入ってしまった。

「私一人暮らしたから遠慮しなくても大丈夫よ」

そう言っただけで、すたすたと廊下の奥へ歩いていってしまう。「両親に気兼ねしなくて良くなるけど、それはむしろマズいのではないっつ、もうどうにでもなれ、と鍵を閉めて靴を脱いだ。

「お邪魔します……」

部屋に入ると、良い匂いがした。一人で使うにはかなり広めの部屋で、物が少ないながらも、ところどころ花瓶があつたり花が生けてあつたりして、この人らしい部屋だなあと思った。

「それ、一緒に食べましょっ」

彼女はお茶を注ぎながら言う。何もかもお見通しみたいで、僕にはもう為す術がなかった。

促され、カーペットの上の丸テーブルの横に座る。僕は紙袋から、後輩たちの手作りお菓子や色紙なんかを取り出した。

湯呑みが二つ、テーブルの上に置かれた。

真正面に座る彼女に問いかける。

「体調、大丈夫なんですか？」

「ええ。今日一日寝ていたから、随分と良くなったわ」

「それじゃあ、今日は何も食べてないんじゃない……」

「そうね。でも今から食べるから」

「で、でも栄養バランスとか……」

「私は、何よりの薬と思うけれど」

何も言い返せない。こんなにもイタズラっぽく笑うこの人の笑顔を、僕は知

らなかったから。

二人、無言で食べ進める。みんなが送ってくれたお菓子は凝っていたのも多くて、とても美味しかった。色紙だつて負けてはいない。僕は決して積極的に闘わるうとはしなかったけれど、それでも、多くの思い出が綴られている。

何気ない日常でも、小さな出来事でも、受け取り方は千差万別だ。

「そういえば」

「？」

「改めて返事、聞けていなかったわ」

彼女はすつと立ち上がり、僕の真横に座る。彼女の身長は僕より高いのだから、座高も僕より高いのは当たり前で、それが緊張を加速させる。でも言わなければならぬ。

僕は彼女の手をしっかりと握った。

「よろしく願います」

「昨日、どうして逃げたの？」

「うっ……それは……」

元々、ちゃんと話すつもりだった。それが、彼女の方から質問として飛んできただけだ。

「だつて……おかしいじゃないですか」

「……………」

「僕は貴女が好きなんです」

彼女は心底驚いた顔をした。そんな表情も、見るのは初めてだった。

「それはちょっと……予想外ね」

顔を逸らす。困惑したような、仕草を見せる。やがて、僕と彼女が繋いでいた手は、ゆっくりと解かれた。

「それなら、握手は相応しくないわ」

僕は彼女に抱きしめられた。柔らかな温もりと、それとは別の柔らかいものが僕の思考を阻害する。

それでも一つだけ頭に残ったのは、もっと早くに彼女と会話を交わすべきだったという再度の後悔。自分の気持ちに正直になれていたらという「もしも」とそうならなかった悲しき。

自分の中に一欠片残った影は、光に照らされてむしろ濃くなる。

そうして僕は、これからの考えるようになった。

○あとがき

『僕』は女の子です。こんにちは。

これは文芸部で出した原稿だったりします。連載はお休みです……。

当初は、終盤辺りで「何イ!? お前が親の仇だったのかアアアッ!」「今さら

ら気づいたのかこのアホウめエーッ!」オラオラオラオラオラオラオラ

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄」という感じで不可解な何かが始まる予定でしたが、そんな風になぶ壊す気が残っていませんでした。

やめたらやめたでオチがつかない(落ち着かない)ので『僕』くんは『僕』

ちゃんになりました。こういうの高校時代によく書いてたね。迷ったら「僕」

が一人称で実は女の子パターン主人公を出すのやめようね!

この後二人は同じ大学に進学します。現場からは以上です。

○(書ききれなかった) 設定資料

『僕』

男装をしている。ついでに目がいい感じに隠れるくらいの髪の毛で、ちょうどいい感じに大きい制服を来てるので小柄で中性的な男の子くらいには見られるかもしれないが結構無理がある。が、本人は男性と主張しているし、さすがに男だろうなあ、と周りは捉えている。ちなみに体育は身体が弱いとの理由で全て欠席している。

そこから辺の事情を『彼女』に伝えるのはしばらく経ってから。

『彼女』

背が高い。すらっとした美人。長い黒髪。無口で無愛想だが最低限の会話はしてくれる。

『彼女』が入学し園芸部に入るとなった頃、同学年の男子たちが二十人くらい便乗しようとしたが『彼女』ともう一人を除いて、草花に関する超簡単なテストにすら答えられなかったため、あえなくふるい落とされた。

彼女としては「おかしいじゃないですか」のセリフについて、「これまで全然話してこなかったのに貴女が好きなのは、おかしいじゃないですか」と解釈しているが、『僕』は「女の子同士なのに、おかしいじゃないですか」という

ニュアンスで言っていた。

『僕』のことはシャイな弟くらいに捉えていたが、いろいろ認識を改めた。

翌年、悩ましい事実に向面する。

『後輩』

先輩二人とは逆で、明るく活発な今時の女子高生。だが、趣味は盆栽と言つと同年代からの友人からたまに「おじいちゃんかよ笑」と茶化されるのであまり他人には話さない。言う時は園芸だとか家庭菜園だとか、ぼかす。

『僕』のことはかわいい先輩と思っている。『彼女』のことは美人な先輩だと思っている。二人がアイコンタクトだけで日々の部活をこなしていくので、ナツと付き合えよと思っっている。その状態で丸一年と半年が過ぎたので今回のように直接的な後押しに切り替えた。

が、『僕』の走り去る姿に胸の苦しみを覚え、以降もややっとした期間が続く。悲しいことに『彼女』には勝てない。

キユウセイの魔女とその騎士

〜リフロンティアと矢印大陸の動乱

マウス

オールドネア城の広間をマキナは急ぎ足で進んでいた。彼の隣にはメ
メが人の姿でいた。杖の状態で行う会話は本来の持ち主であるアデル
の手になければ行えない為だ。

「これからどうする？」

「いったん屋敷に戻って、アデルたちには待機してもらおう。流石に俺
がパーティに参加しないのはマズいが、同行者なら理由を付けければ問
題ない。屋敷の中ならそうそうヴラドも手を出せないだろうし——」

「……どうやら、遅かったみたいだが」

「まあ、そうなるか……。始めから聖装の持ち主は特定されているん
だからな。それにしても手回しの早いことで」

彼らの視線の先、城の玄関口に見知った人影が見えた。

「あ、マキ……じゃなくて、そっちの用事は終わったの？」

「ああ。随分来るのが早かったな。それと……人の目がある場所で、

名前は間違えないようにな？」

「う、ごめんなさいねシル。その……未だに慣れなくて」

アデルとノエルの二人が加わった。着付け係としてメイドも同行し
ている。これは、マキナにとって想定外の状況ではなかったが、それ
でも表情に僅かな動揺を滲ませた。

「使いの人が呼びに来たから。馬車だったから結構時間かかったわね。
空から運んでくれればいいのに」

「亜人に命を預けるようなもんだからな。中には抵抗を感じる人もい
る。そういう客に配慮しているんだろう。それはそうとアデル、ちょ
つといいか？」

マキナはアデルをそっと招き寄せ、小声で会話を始めた。

「使いの奴に、何かおかしいな様子はなかったか？」

「特に不審な点は見受けられなかったけど、どうかしたの？」

「いや……分かった。何かあったら教えてくれ」

極力疑念を持たせないようにマキナはそこで打ち切った。周りの様
子を窺い、下手に動くより彼女を傍に置いておく方が安全だと判断す
る。

「ねえ、近くに女の子いなかった？ 傍に見えたような……気のせい
だったかな」

「ん？ ああ、城の使用人でも通り過ぎたんだろ」

「そっか。なんかやけに頭に引っかけたってさ」

「気にするなよ。それが一番いい方法だ」

「あ、れ？ ……うん、なんだかそんな気がしてきた」

「……………マキナ。あなた——」

「ああそうだ、これを渡しておくよ。パーティが終わるまで、大事に預かっていてくれ」

訝し気な表情を浮かべるアデルにこやかに頼みながら、彼はその手にあつた二振りの黒杖を手渡した。



今回の主賓であるマキナとその同行者には、特別な控室が用意されていた。他の来賓者が準備を済ませてから訪れる中、彼らはこの城内で着替えなどを行うとされていた。マキナに言わせれば、逃げる暇も与えぬという、ヴラドの奸計に違いないのだが。

「ねえ、似合うかな？ ……こういうの初めてだからさ。キンチョーする」

「そうね……草むらの片隅に咲く野の花って感じかしら？」

「……………うん、褒められてるんだよね？」

「もちろん。すごく可愛らしくて素敵だと思う」

頬を引き曇らせるノエルに対して無邪気に微笑むアデルがそこにいた。二人はマキナに一足早く着替えを済ませている。

本人の純朴な可憐さを損なわない黄色のドレスに身を包むノエル。

それとは対称に、衆目を一身に集めるだろう情熱的な赤のドレスを身にまとうアデル。

「野の花かあ。それじゃあ、シヤクナゲなんてのが似合いそうなアデルには完敗だね」

「高嶺の花、ね。私はそういう花より、元氣よく咲き誇る名も知れない花の方が好きだわ。それにシヤクナゲには毒があるのよ？」

「うん、知ってるよ。錬金術に使われる毒の勉強はよくしてるし」

「……………え、知っていてそう言ったの？ それじゃあまるで、私に毒があるみたいじゃない。ふふ」

「いやあるでしょ」

「ッ！？」

「あ、ごめん。ついポロつと本音が」

「そこは冗談だってフォローするところじゃないかしら……………？ いや、そんなことより何故私に毒なんて要素が含まれたのか——」

「あー、すまん。待たせた」

アデルが自身の発言を振り返ろうとしていたその時、マキナが居心地の悪そうな表情を浮かべながら着替え用のスペースより現れた。

「おっそーい！ 今日の主役はあんたなん、だから——」

「……やっぱり変に見えるか？」

「ううん、そんなことない。そんなわけ、ない」

ノエルが慌てたように否定する。口元が少しだけ震えていた。

「これまでではなるべく動きやすい服装を選んでいたら気にならなかつたんだが……。流石にこれは、ちよつとな。胸とかさ、出しすぎな気がするし」

流麗な金髪をなびかせ、透き通るような碧の瞳を宿す顔。頭からつま先まで、曇りなき真白の体軀は、まるで創造主が技巧を凝らして作り上げたようだった。

今、その体を青いドレスが包んでいる。名のある職人が縫い上げた逸品は、一見豪華な装飾のない質素なものに見えるが、それを着る者が美しくれば美しいほど、その在り様を邪魔することなく際立たせた。

「でも、着るしかないよなあ。ありがとう、着付け助かった……ん、どうした？」

「いえ、なんでもありません。シルメリア様の肌が、その。大層美しかったですから」

メイドは熱に浮かされたように頬を紅潮させて顔を背けた。着付けの際に見た光景を思い出したのか、柔肌に触れた己の指を眺めている。

「……青い薔薇」

「奇遇ねノエル。私も同じ言葉が頭に浮かんだわ」

物語の中にか存在しえない程の美を湛えるマキナの姿に、アデルたちは息を呑んでいた。

「ねえマキナはさ、元々男なわけじゃない？ 鏡に映る自分の姿に思うところとかないの？」

「まあ、美人だとは思うけど」

「それだけ？ 正直に言つて女の私でも見惚れたよ？ もっとこう感動するとか興奮するとか」

ノエルが身を乗り出して質問するが、マキナは困ったように頭を掻きながら答えた。

「……余計な感情じゃないか？ だって、いちいち反応していたらキリがないしな」

「確かにそうだけどもさあ。でも、そういう感情って理屈でどうこう出来るものでもないじゃん。というか、その姿に何の気持ちも抱かないなら私とかどうなるの？」

「すごく似合ってるし、俺なんかよりずっと見る価値があると思うが。アデルも同じくな」

「ふ、ふーん。お世辞でも嬉し、ひ……ひひひひひひ」

「おい、照れるにしても笑い方が気持ち悪いんだが」

「よく言ったわマキナ。ありがとう」

「えーつと……どういたしまして？」

徐々に外から活気のある声が聞こえ始めた。

「ほかの客も大分集まり始めたみたいだな」

「わざわざノエルたちを外に出したつてことは、メメに関すること？」

「それと、君自身にも関わる重要な話だ。……ノエルは、たまたまつ

いて来ただけでさ、普通の女の子なんだ。巻き込みたくない」

用を足しておいた方がいい、とマキナはそれらしい言葉でノエルを

部屋から外させていた。メイドも彼女に付かせて一緒にここを離れている。

「手短かに話そうか。俺たちを呼んだ大公ヴラドはメメの存在を認識している。その所有者が俺でなく君であることも。彼は冒険者ギルドを通じて、君がここを訪れる様に仕組んでいた可能性が高い」

「メメが狙われている？」

アデルは客船で出会った男を思い出していた。彼はメメに触れることで何かを得られると、多くの財宝を譲ってまで交渉に応じた。彼は特殊な一例だろうが、なんにせよ死者を蘇らせるという力は多くの人々の目に魅力的に映るだろう。

「そこなんだがな。俺は、その可能性は低いと考えている。もしも向こうにその気があるなら、とつくと奪われているんじゃないか？ 先ほど、俺は一人でメメを持って出向いた。主ではない俺がだ。当然その能力は振るえない。襲うならこの上ない好機だと思わないか？」

ヴラドが竜王ヶ原での戦いを見ていたとすれば、メメの能力は知られている可能性が高い。傷を癒し、死すらも超越する道具を持つ相手からそれを強奪するのは、如何に優れた部下を多く持つ彼であっても骨が折れるであろう。しかし、あの謁見の場でマキナに奇襲をかければその苦勞は必要なかった。

「メメが狙いでないとすれば……アデル。君に危害が及ぶかもしれない。十分に気を付けてほしい」

「さつき使いの人の様子を聞いてきたのはそういう訳ね……でも、私が狙われる理由なんてあるのかしらね。もちろん、出来る限りの警戒はするけれど」

「……………」

『聖装は純粋な人間では決して扱えない』

ヴラドとの会話で出た話を伝えるか。逡巡の末にマキナは言葉を飲み込んだ

『マスターの肉体について、伝えなかったことは悪いと思っている。だが私にも、それが人間を超越した何かである、ということしか分からないんだ。余計な不安を与えることを恐れて黙っていた。私自身も……怖かった。』

謁見が終わった直後、マキナに問い詰められたメメが吐いた言葉だ。

「衆人環視のある会場内で何か仕掛けてくるとも思えないが、頼む」

そろそろ時間だ、とマキナが言ったのとほぼ同時にノエルが部屋に戻ってきた。

「外でお城の人が待ってるって。準備出来次第だつてさ」

「はは、ぴったりだな。じゃあ……行くか」

この上なく気の抜けない宴が始まる。

続く